

。ㄣㄣㄣㄣ

< Intro A >

彼が家に来る。

と言っても親にアイサツだとかそういうお力たいもんじゃないで。

そもそも独り暮らしだから親はいないわけで。

『独り暮らしの女の部屋』という話題がキツカケ。

「じゃあウチくる？」

「行く」

即答で決。

初めて、彼が家に来る。

掃除は完璧、準備は万全。

さあ、どっからでもかかって来い。

< Intro B >

彼女の家に行く。

と言っても、同居の許可とか結婚の許可とか仰々しいもんじゃないで。  
いつかは行ってみたいもんだけど。

「お父さん！ 娘さんをぼくにください！」

「何を！ 一度言ってみたかった！ 許さん！」

みたいなね、みたいなね。

それはそれとして。

初めて、彼女の家に行く。

なんだかソワソワしてしまう気持ちをどうにか押し込んで。

いや、押し込め切れないんだけど。

ケータイからリダイヤル。

「——もしもし？ うん、駆着いたよ？」

へ 彼のコト。く

メガネ。

寝癖。

背丈は平均的。

き、き、き……気楽な性格がナイス。

す——好きな人。

『駆着いたよ？』

「ちよつと待ってて、今行くから」

ケータイを切って、上着を羽織って。

ストールで首を巻いたら完全防寒。

彼を迎えに、家を飛び出した。

へ 彼女のコト。く

笑顔。

可笑しい時に笑う仕草。

さわるとやわらかい髪。

見た目より中身重視。

し、し、し……

し——しっかり、愛したいと思えた人。

『ちよつと待ってて、今行くから』

「は——いい、待ってます——」

切れたケータイをポケットに仕舞い込む。

どんくらいでここに来るんだろう？

タバコ一本くらい吸えるかな——とタバコケースを取り出したところで、眉をかめる彼女の顔がちらついた。

……やめとこ。

タバコもポケットに仕舞って。

日曜日の昼下がりに、ぼくは待つ。

大好きな笑顔が駆け寄ってくる時を。

へ 柚子茶のコト。ゝ

柑橘系の香りを彼は好む。

何の話をして出たのか忘れてしまったけど、冬の寒い朝、彼は柚子茶を飲んで体を温める。

冬季限定の彼の好物。

冷える体を温めてくれる、湯気に混じった柚子の香り。

「いらっしゃいませ」

ドアを開いて、お先にどうぞと促す。

「お邪魔しまーす」

遠慮がちというか、恐る恐るというか。

「なんか、怪しい人みたいだよ？」

キヨロキヨロしながら入る彼の背中中は、まさに挙動不審者。

「いや意外とキレイなんだなと思ってさ」

「独り暮らしの女の部屋は腐海だったのは、ただの先入観だって」

「認識改めます」

「そうしてください」

「そっから、キレイなもんなのか」

「いいからとっとと入れ」

玄関に留まり続ける彼の尻に蹴りを1発。

「あ、早速DV？」

「いいから」

彼を押し込んでドアを閉めた。

「適当に座ってて。今お茶淹れるから」

「お構いなくー」

「いらない？」

「超ほしい、超喉渴いた、超お茶飲んでー」

「じゃあ大人しく座ってて。面白いもんじゃないけど」

「ほーい」

手近にあったクッションに腰を落ち着けた彼。

もそもそと上着を脱ぎ始めたのを見て、

「ハンガーあるから適当に掛けといてね」

「ほーい」

返事を聞きながら、あたしの手は湯を沸かす。

ガス台に置いた小ぶりのビンを手にとって振り返っ――

「どわっ！」

「うわっ！」

すぐ目の前に彼がいた。

思わずビンを放ってしまうくらい。

『びっくりしたあ』

声が重なった。

同時に吹き出した。

「気配消すなよ」

「いきなり振り向くなよ――あれ？」

床に転がったビンが彼の視線を引く。

「ブランドとかよく知らないから、適当に選んだんだけど」

拾い上げたビン。

柚子色のビン。

冬季限定、彼の好物。

「それ、いつも買ってるヤツ」

彼の笑顔が、あたしの好物。

へ  
アールグレイティのコト。く

柑橘系の香りを彼女は好む。

喫茶店に行けば必ずアールグレイティ。

夏はアイス。

冬はホット。

彼女の喉を潤すのは、いつだって薄く香る柑橘系。

「何か手伝えることある？」

「んー、まずはお湯が沸かないことには」

柚子茶のフタに手を掛ける彼女。

「じゃあ、ちょっと時間あるね」

「うん。だから、待っててっ」

声ごと力む彼女。

「なんか、どっかり座ってるってのもな」

「お客さんが何言ってるの」

彼女の手からビンを取って、代わりに後ろ手に隠していたものを手渡した。  
薄くて、丸くて、小さいレコードが入れられるような、アルミの缶。

「え、これ」

「おみやげ」

彼女に対して頑固だったビンのフタをひねる。

かぽっ。

うん、素直でよろしい。

「わざわざ買って来てくれたの？」

「好きだって言ってたでしょ？」

「なんていい人なんだ」

「いいカレシって言って」

アルミの缶に目を輝かせる彼女を見て、内心ほっとした。

彼女の好きな、アールグレイティの缶。

たまにしか買わないと言っていた、ティーショップのアルミ缶。

「ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ柚子茶を用意していただきました」

頭を下げ合って、笑い合う。

いつだってぼくを潤す、彼女の笑顔。

ヤカンが湯気に鳴った。

へカレのコト。く

テーブルに並ぶ2つのティーカップ。

あたしのアールグレイティ。

彼の柚子茶。

小ぶりのテーブル1つ分の距離で交わす談笑。

「もっと、こう、ごちゃごちゃしてると思ってた」

まだ言うかこの男は。

「人によるよ。そういう人もいるだろうし」

「やたらめったらカラフルなカーテンとか」

「うちは2色水玉」

「ぬいぐるみいっぱいとか」

「クッションなら5、6個あるけど」

「アイドルのポスターが、ばーんと」

「好きなアイドルがない」

「下着転がってるとか」

「片したからね」

にやり、彼の唇が歪む。

「転がってたんだ」

「ちゃんと片付けてますう！」

などなど。

ちよつと部屋が暗いなと感じて蛍光灯を付ける。

時計を見上げたら、とつくに夕刻。

「今日はご飯食べてくんでしょ？」

「うん」

喜色満面、子供っぽく笑う彼の笑顔が愛おしい。

ずっとそばにいたいんです。

「晩御飯の支度、するね」

上げたあたしの腰にまるで紐が付いていたみたいに、

「手伝うよ」

彼の腰まで一緒に上がった。

「お客さんでしょっ」

「どっかり座ってるだけ、つてのも何だか手持ちぶたさなんだって」

「手持ち『無沙汰』ね」

「……手持ち『ぶたさ』」

「変なところで負けん気強いよね」

「おじゃまたくし」

「おたまじゃくし」

「とうもろこし」

「とうもろこし」

「えーっと」

「もういいからっ」

彼といると、落ち着く。

性が合ってるんだと思う。

何でもない時間をしようもない話で潰してるだけでも楽しいし、自然に振舞える。

あたしはあなたが好きですと、自然に振舞える。

好きです。

あなたは、どうですか？

へカノジョのコト。く

彼女と一緒にキッチンに立つ。

さ、何から始めてやろうか。

「今日の晩御飯は何にするんですか？」

「シチューです」

しっかり答えてはくれたものの、マイク代わりにしていたおたまはあっさり没収された。

「ほう、シチューですか」

「はい、シチューですよ」

「ぼくは何を手伝いましょうか」

「じゃあ、応援してください」

フレー。

フレー。

カ・ノ・ジヨ！

「……そういうことじゃないんだよね、ぼくがしたいのは」

「わかってるわかってる。野菜渡すから片っ端から切って」

「片っ端から切って、って」

「ん？」

あまりに極端な物言いに啞然としてみると、彼女は早速じゃがいもをぼくに手渡した。



「……何でもないです」

「嫌いなものってあるんだっけ？」

ガス台に鍋を置きながら、斜めにぼくを見上げる、この彼女の角度が好き。  
いや、もちろんそれだけが好きってわけじゃないよ。

「嫌いなものはね……えっと……あっと……」

「ないのね」

「そう。ないの」

これまたあっさり話題を切り落とされた。

「ほら、早く野菜切るっ」

「ほいほーい」

まずはじゃがいもの皮を剥きながら。

——じゃあ、好きなものはなに？

頭のどつかで、誰かが尋ねた。

もしもこれが彼女だったなら、ぼくは即座に答えられる。

ぼくはあなたが好きですと、即座に答えられる。

あなたといられて、幸せです。

幸せなんです。

あなたは、どうですか？

「……あ」

「うん？ 指でも切った？」

右手に皮むき機。左手にじゃがいも。

斜めに見上げる彼女を抱きしめる代わりに。

「好きです」

言葉が、出た。

へコトコト。く

今までのコト。

これからのコト。

笑うコト。

楽しいコト。

平和なコト。

泣くコト。

泣かせるコト。

怒らせるコト。

怒るコト。

ケータイに出なくなるコト。

ケータイを掛けなくなるコト。

少しだけ、気持ちが悪く離れてしまうコト。

それでもやっぱり、2人でいられるコト。

いろんなコトを鍋に放り込んで。

じっくりコトコト煮込み続けて。

時々味見して微調整。

とろとろになったら食べ頃です。

『ふたり』を、育もう。

何でもない日々を、2人で過ごして。

2人の愛を、育んでいこう。

不束者ですが、これからどうぞ、よろしくお願いいたします。

「コトコト。」

Written by nakoso

© nakoso 2009

Release Date 2009/01/28 on Bottle Novel

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

[nakosokan@gmail.com](mailto:nakosokan@gmail.com)



「コトコト。」 by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示・非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>